

国登録有形文化財(建造物)候補「赤尾家住宅」の概要

(1) 名称

赤尾家住宅 主屋、店舗兼住居、土蔵、材木倉庫 計4件 ※いずれも内部非公開

(2) 所在地（住居表示）

姫路市網干区新在家 895

(3) 概要

赤尾家住宅は、市城南西部の網干区新在家にあり、当地を東流する網干川の南岸に所在する。網干地区は古くから港町として発展したが、江戸期に姫路藩領が成立した後に龍野藩領となり、さらに村ごとに丸亀・龍野・幕府領にわかれるなど、領主の変遷は複雑な様相を示した。江戸期の新在家村は、西の興浜（おきはま、旧奥浜）村、西北の余子浜（よこはま、旧横浜）村と共に網干3ヶ村と称され、新在家は万治元年（1658）に龍野藩領時代の領主であった京極家が丸亀に移封された後も龍野藩領のままであったが、興浜と余子浜は丸亀藩の飛び地領地となった。

赤尾家住宅の北側を流れる網干川は、龍野藩の他、揖保川流域の物資の集散地として栄えた。兩岸には船着場が形成され、建ち並ぶ屋敷や蔵も川に面して石階段を設けるなど、物資や人々、船便や筏、高瀬舟などが往来でにぎわったという。また、新在家村には藩の蔵屋敷が建てられたほか、当家南の網干小学校には藩邸が築かれるなど、藩政上も重要な土地であった。網干川は昭和46年（1971）に護岸整備（現在も釣り船等の船着き場として利用）が行われ、沿川景観は大きく変化したが、戦災を免れた当地区には歴史的町並みが多く残されている。

赤尾家は、もと商家の家系で、江戸後期に赤穂より網干に移り住んだ初代治良左衛門が赤穂屋（アコヤ）の屋号で材木商を営みはじめ、4代治三郎より赤尾を名乗ったと伝わる。材木商は7代龍治の頃に閉業したが、当時の様相を残す建造物は9代目となる現当主に引き継がれている。

なお、7代龍治は、網干区浜田に所在する臨済宗妙心寺派寺院の龍門寺（本堂等が市指定文化財）の開祖、盤珪禅師の研究者として活躍した。研究書のうち盤珪禅師全集は仏教学会では初出版と言われるもので、郷土史研究家としての文化的功績は高く評価されている。また、7代龍治の弟俊郎は、赤尾兜子（とうし）の俳号で活躍した俳人で、当家には同級の作家司馬遼太郎や、一年上級の作家陳舜臣が訪れ、親交を深めていた。なお、昭和52年度（1977年度）に7代龍治が、昭和55年度（1980年度）に俊郎（兜子）が、兵庫県文化賞を受賞している。



店舗兼住居 外観 正面(南面)



主屋 外観 正面(南面)

①主屋：大正8年(1919)建設

網干川南岸の道路沿い南面して建つ旧材木商の主屋。木造2階建て、切妻造り本瓦葺きで、大壁鼠漆喰塗りの2階を軒まで塗籠め、軒と虫籠窓は白漆喰塗とする。1、2階とも整形四間取で、背面に平屋建ての台所棟が突出する。2階座敷は床廻りに唐木を用い、意匠にも凝る。網干の歴史的な町並みを形成しており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

補足解説：5代治助により建設されたと伝わり、1階の出格子や2階の虫籠窓など、網干地区における大正期の町屋の表構えを良く残す。内部1階は東に通り土間を配して実用的なつくりの居室を並べるが、2階は精緻な意匠の座敷を配すなど、当時の網干地区の商家主屋の様相を示している。



主屋 内部1階 ミセ土間

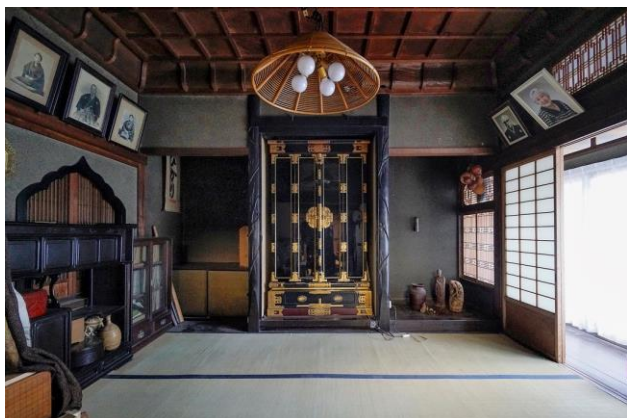


主屋 内部2階 座敷

②店舗兼住居：昭和9年(1934)頃建設

主屋の西側に接続して建つ。木造2階建て、入母屋造り棧瓦葺きで、南正面の下屋に入母屋造の庇を切上げる。座敷や仏間の床廻りに銘木を用い、随所に意匠性に富む窓や欄間を設け、ミセや洋間等はベニヤ張の幾何学意匠の天井を張る。材木商による材木と意匠に凝った上質な近代和風建築で、「造形の規範となっているもの」として評価された。

補足解説：6代常治により建設されたと伝わる。L字型平面の建物で、東西棟の正面建物の背面西側に、入母屋造りの建物が一段低く接続する。仏堂風意匠や洋風意匠を取り入れるなど、近代の住宅建築らしい和洋折衷の様相を示している。



店舗兼住居 内部1階 仏間



店舗兼住居 内部1階 ミセの天井

③土蔵：昭和9年（1934）建設

店舗兼住居の北側に中庭を介し南面して建つ。切妻造り本瓦葺きで東側を落棟とし、西は2階建ての内蔵、東は平屋建ての米蔵とする。外壁は漆喰塗りで、正面の腰を海鼠壁、側背面の腰を縦板張りとし、正面に掛子塗り戸と格子戸を開く。内部は各蔵各階一室。風格ある外観が港町の景観を形成しており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

補足解説：5代治助の妻「わい」が建設したと伝わり、御幣には大工棟梁の勢川利一の墨書きがある。切石を重ねた基礎上に建ち、正面は石階段を設けて、内蔵戸口は鳥居型に、米蔵戸口は木瓜型に設える。掛子塗り戸は3段とし、裏側は木瓜型に縁取って内を黒漆喰で仕上げる。外壁は軒先まで漆喰で塗り籠めて、軒下には鉢巻を廻す。内蔵2階は梁を渡して束を建てた小屋組みを現す。



土蔵 外観 北西より



土蔵(米蔵) 外観 正面(南面)

④材木倉庫：明治43年(1910)建設

敷地東辺北寄りに建つ半切妻造り桟瓦葺きの大型木造倉庫。背の高い平屋建てで、北を広大な吹抜けの材木倉庫、南を中2階建ての納屋とする。外壁は縦板張りとし、軒廻りを漆喰で塗り籠める。牛梁二本を並べる小屋組は独特の架構。網干川周辺の歴史的景観を現在に伝えており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

細部解説：5代治助により建設されたとみられる。かつては北面近傍まで川が迫り、船から直接荷揚げを行っていた。現在も荷上場用の石積みが残る。網干地区では残存の少ない半切妻屋根の大型木造倉庫で、材木倉庫の西、北、東面には、材木の立て掛け用に、柱間四つ割に小幅板の荷摺り棒を張り廻している。



材木倉庫 外観 北面



材木倉庫 内部 北を望む